



## 【思い出のお正月】

the New Year of reminiscences

### 旧正月と新正月

工藤 莞司

現在では、旧正月を知る人は少ない。えっ！ベトナムのことなどとなるかもしれない。我が幼少の頃は、田舎ではおしなべて旧正月が新年の始まりであった。大体現在の一月末から二月の初旬頃に元旦を迎えた。多分、明治になって太陽暦を採用したが、地方には江戸時代から慣れ親しんだ太陰暦が残っていて、気候や農作業の都合から旧暦正月を踏襲していたのだろう。

当時のカレンダーには、旧暦も併記されていた。我が家でも、当然に旧暦の一月一日を正月として、年末年始の支度をした。歳末を迎えると、田舎町のメインストリートには市が立ち、正月用の食品や飾り物、餅つき用臼や杵、蒸籠などが並んだ。近郷近在から大勢の老若男女が買い物に押し掛けた。子供達も、某かの小遣い銭を貰って、立ち並ぶ屋台を覗きながら市の中を上下したものだだった。

これに比べて、新正月（当時現在の元旦をこう呼んでいた）は寂しいものだった。学校は年末年始の休みではあるが、何も無い。しかし、元旦には学校に集合して新年の祝賀式が催されて、正装した校長や町長の年始の挨拶があり、生徒には紅白の饅頭が配られた。新正月普及行事の一つであったのだろう。これも小学校低学年でお終いになったと思う。

外は雪で、もっぱら家で過ごすしかない。それでラジオを聞いた。当時は正月は箱根駅伝の実況放送があった。兄と二人、炬燵に潜り込んで毎年新正月は駅伝競走を楽しんだ。覇者の大学は早稲田である。地方でも当時から著名ブランドであった。しかし、中央大学が断然強く連覇中で、昭和40年まで六連覇を飾った。小憎らしい位に強かった。歴史は皮肉で、偶々中大に入学した途端に優勝から見放されてしまった。これが高じて現在でも、正月は箱根駅伝、駅伝といったら箱根で、1月2日・3日である。時には箱根に出掛けて、兄は早稲田、小生は中央を声援している。

今では、我が故郷と雖も新正月である。おそらく半世紀近くなるだろう。そして、毎年我が家は、箱根駅伝で正月を迎えている。

### 加齢とともに変容する 親戚の正月の集まり

橋本 俊史

我が家では毎年、祖父母の許で正月を過ごす。親戚一同が集まり、互いの健康を確かめ合いながら昨年の思い出と今年の抱負を語るというのがいつもの光景なのだが、やはり時間が経つにつれて歳が近い者同士で集まり、自然と大人と子供がそれぞれのグループに分かれてまとまっていく。小さい頃の私も、大人たちとの年始の挨拶もそこそこに、歳の近い従兄弟たちと久々の顔合わせを楽しんでいた。

しかし、いつの頃からか次第に従兄弟たちと話をする時間よりも大人たちと喋る時間の方が長くなり、気がつけば今では祖父母や親、叔父叔母と一緒にいることの方が多くなっている。他の従兄弟たちも1年経つごとに年長者のグループにいる時間が長くなる。小さい頃に受け付けなかった食べ物や飲み物、聞いても分からなかった話が全て身近になっていることに気づくと、より積極的に大人たちの席に混ざろうとして、結果、今ではほとんど年長者たちと一緒にいる状態だ。

そういうことに対して私が自覚的になったのは、大学を卒業して働き始めた最初の正月である。やはりそれには、自分が社会人になったという意識が一番大きく影響していたと思う。自分の正月の過ごし方を鑑みて、改めて自分が社会人になったことを意識することもあった。ある種の区切りとなった、記憶に残る正月だ。

今後はおそらく、現在学生である年下の従兄弟たちも、成長して社会に出ていけば次第に私と同じようなふうになっていくだろうと思う。一人また一人と年長者のグループに腰を落ち着ける者が増えていき、いつかは親戚一同の中で大人と子供に別れることなく、全員が揃って1つの卓を囲み、年始の顔合わせを楽しむようになる。親族が皆健在であるうちに、そんな正月が実現できれば嬉しい。もし実現できたとしたら、その正月はまた私にとって思い出深いものになるはずだ。そういう正月が今から待ち遠しい。

# 【思い出のお正月】

the New Year of reminiscences

## 小さな幸せをくれた車内アナウンス

A. Y

忘れられないお正月がある。大学2年生の年のお正月だ。

大学時代、実家を出て1人暮らしをしていた私は、最寄り駅のそばのコーヒーショップでアルバイトをしていた。その年も学生らしく、冬休み中は毎日のようにバイトに明け暮れていたの、大晦日くらいは休めるだろうと信じていた。一人暮らしをしている学生は、暗黙の了解として優先的に帰省が認められていて、「お正月は実家に帰ります」という言葉威力は絶大だったからだ。店長や他のバイトになにを言われても、この言葉でかわせると思っていた。思っていたのに。

30日。その年最後のバイトになるはずだった日に、友人のキャストマネージャーに絡まれた。店に顔を出すなりバックルームに連れ込まれた私は、この時点でもう帰りたいほど嫌な予感がしていた。そのマネージャーが31日のシフト管理担当だと知っていたからだ。さらに運が悪いことに、マネージャーである彼女は私の実家が本当は電車で2時間程度の場所にあり、「帰省」なんて大げさなものじゃないことを知っていた。そして大晦日から元旦にかけてのJRは一晩中運転していることも、もちろん知っていた。私の「実家に帰ります」は、彼女の「働いてからでも帰れるじゃん！」の前に敗北し、あえなく大晦日も出勤することになったのだ。

大晦日は忙しかった。クリスマスもイブのほうが盛り上がるのと同じように、お正月も前日の夜のほうがイベントじみている。いつもより少ない人数で店を回すバイトたちは、もはやコーヒー屋の店員ではなくて、立派にガテン系だった。ようやく店を閉めたときには今年も残り1時間を切っていたけど、親に「元旦には帰る」と言ってしまった手前、私はそのまま大きめのカバンを手に電車に乗り込んだ。

電車はそれほど混んでいなくて、同じ車両にはぐでんぐでんに酔っ払ったおじちゃんたちや、ものず

ごく密着したカップルが疎らに座っていた。一番端の座席に座ってその光景を見ていると、働いていた間は忘れていた感情が少し込み上げてきて、私はすぐに寝たふりをした。

そして電車が東京駅に入り、時間調整のために少しだけホームに停車していた頃、日付が変わって年が明けた。なんとなく握っていた携帯で年が明けたことは分かったけれど、電波の入りにくい地下ホームでは友人とメールをすることも出来なかった。一人しょぼくっていたそのとき、車内アナウンスで車掌さんが言った。

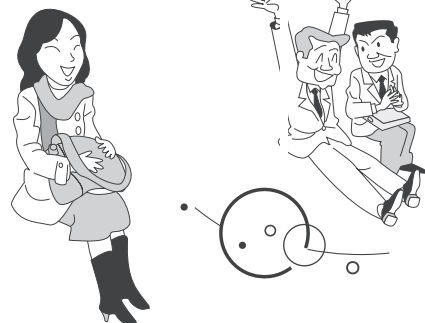
「ただいま日付が変わりました。あけましておめでとうございます」

私は思わず天井を見上げてしまった。酔っ払いのおじちゃんたちも嬉しそうに話し出して、車内が俄かに活気付いた。妙な孤独感が軽くなったのが自分でも分かった。

本当に短い言葉だったけれど、あの車内アナウンスを私は今でも忘れられない。東京駅地下ホーム4番線で、最初に新年の挨拶をしてくれたのは粋な車掌さんだった。全てのJR線であんなアナウンスをしてくれるかどうかは分からないけれど、あれは大晦日用のマニュアルではないと思いたい。きっと私はラッキーだった。

あのときの車掌さん、どうもありがとう。

ただいま日付が変わりました  
あけましておめでとうございます。



# 特集

## 【思い出のお正月】

the New Year of reminiscences

### ミレニアム効果でプロポーズ

T.O

お正月といえばおめでたい雰囲気を連想しますが、2000年のお正月はそんなおめでたい雰囲気とは別の何か特別な雰囲気だったと今でも思います。

1999年はノストラダムスの予言の「世界の終わりの年」とされた年で、2000年はシステムの年のケタ表示が問題視された年です。特に、2000年は1900年になるのとは違い、4桁目の数字が変わるという1000年単位の節目の年でした。そんなわけで、当時は1999年のノストラダムスの予言が外れた辺りから2000年が近くなるにつれ、世間はミレニアムと騒ぎ出し、少なくとも僕は浮き足立っていました。

そして、ミレニアムを迎える一週間前に、先輩が先輩の彼女にプロポーズすると言い出しました。僕よりも、というか、世間的に見てもトップレベルに浮き足立った人がここに一人。プロポーズする日は、まさに2000年になるその日でした。

今まで、バカンス効果とかクリスマス効果とかイベントに便乗して彼女を作るという、便乗商法に似た手法を数多くみてきましたが、ミレニアム効果を使う手法はみたことがありません。しかも効果は全くの未知数です。

その日から僕ら後輩たちの話題は、その先輩が一体どんなセリフでプロポーズするのだろうかでした。ミレニアムにふさわしい一言。まったく思いつきません。先輩に直接聞いても「お前らに言うと、絶対にうまくいなくなる」と、確かに少し的を射ているようなことを言って教えてくれませんでした。

人々が鐘について煩惱を取り、時計が12時を指して2000年を迎えました。いつものお正月とは違うお祝いムードの中、ちょうど今頃、先輩はプロポーズしているのだろうかと思うと、なぜか不安な気持ちが混ざり不思議な気持ちでした。そんな不安な気持ちを抱えたまま、いつも以上に盛大に祝福された新しい年を迎えたことが、僕にとって特別な雰囲気を感じさせたのだと思います。

その後、先輩の披露宴で、僕らはプロポーズの言葉を聴くことができました。テレながら先輩が言った言葉は「21世紀もいっしょにしよう」だったと思います。21世紀は2001年からでは...とその場でみんな思いましたが、幸せムードに水を差すこともありません。少なくとも僕らはもう使うことが無いミレニアム効果の有効性が確認された瞬間でした。そんな2000年のお正月はいま思い出してもなんともいえない気持ちにさせてくれるお正月です。

### 新年早々、やらかしました くれぐれも、親には内密に

川俣 貴子

2006年、お正月をニューヨークで迎えた。前年の大晦日、現地訪問の際の定宿である知人の弁護士宅にて、ヴーヴ・クリコで乾杯！し、お祝い気分は最高潮。

夜10時過ぎ、新年をどこで迎えようかと、地元紙で当たりをつけてから街に繰り出すことにした。連れも私も賑やかすぎるタイムズスクエアには興味ナシ。徒歩5分の距離のヴィレッジ・ヴァンガードも、お正月価格に閉口し敬遠。目ぼしいジャズクラブに電話で問い合わせると、既に満席もしくは数少ない自由席は勿論先着順で競争率高し。

そんなこんなで、とにかく散歩がてらどこか見つけようと、出かけることにした。忘れ物を取りに戻った連れを独りで待っていると、白人男三人組に、エスコートサービスのおねえさんと間違われた。特別煌びやかだったわけでもないのに、失敬な。

それはそうと、外気の冷たさはそれ程でもなく、軽く彷徨った末、適度に怪しくて何となく楽しそうなブラジリアン・ダンスクラブに行き着いた。やっぱりお祝いはシャンパンよね、とか何とか言いながら、更にグラスを空け、気分良く新年の幕が開いた。

と、そこまでは良かった。単なるナマイキな正月バナシの一つとなるはずであった。しかし、あることが、新年早々甘くて爽やかな悪魔(?)に魅入られてしまったのだ。その名もカイピリーニャ。ライムがどっさり入ったブラジル生まれのこのカクテル、曲者である。軽快なリズムに合わせて踊っては飲み、飲んで踊るを何度繰り返したのだろうか。記憶は楽しさの絶頂で途切れていた。

気分の悪さを克服してから聞いた事の顛末。もはや自力歩行が不可能な酩酊状態の帰り道、よろけてコンビニの棚を倒し、軽く頭を打った私が連れに八つ当たりをしている現場に警官が居合わせた...らしい。警官は私を心配して見せる一方、連れを訝しがった割には何もしてくれなかった...らしい。ごめん。

いつまでたってもお転婆ですみません...な～なんてナメた発言は飲み込んだ。こんなことでは、あつという間に文字通り単にその辺ですっ転んでる婆さんになりかねない、と正月早々自らを戒めた。最悪そんな状況に陥っても、常に助け起こしてくれる誰かが側にいてくれることを望んでもいいが。



# 【 思い出のお正月 】

the New Year of reminiscences

## 会心の書初め「希望の春」

ゆら

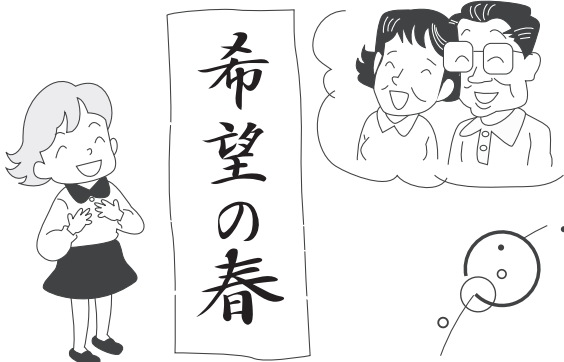
小学校6年生の冬休みのことです。私は、学校から出された唯一の宿題「書初め」に四苦八苦していました。左利きである私は、右手で字を書くのはおろか、筆を持つことさえもおぼつかない状態でした。「この書初めが教室の後に貼り出されるのか・・・」と考えるだけで、憂鬱になるほど下手だったのです。

そんな私を見て、母親と祖父が「手伝おうか」と声をかけてきました。しかし、二人とも毛筆に慣れていないらしく、書いては首を傾げの繰り返し。祖父にいたっては、私そっちのけで筆を独占し、すっかり自分の世界に入り込んでしまいました。

人の手を借りずに自力でやろうと腹を括った時、祖母が「私も書いてみようかしら」声をかけてきました。祖母に一縷の望みを託したところ、なんと上手いこと。祖母の字は、女性らしくしなやかで、納まりが良いものでした。家族全員が、祖母の意外な才能に驚いていましたが、特に祖父は、夫婦生活40年以上での新たな発見に感動していたようでした。

この時の私にとって、祖母は正に救世主。孫から尊敬のまなざしを向けられ、祖母はちょっと気恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに手ほどきをしてくれました。

祖母に手を添えて貰って書いた会心の作「希望の新春」は、めでたく を貰い、私は休み時間になる度に、廊下に張り出された自分の書初めを得意げに眺めていたことを覚えています。



## 中山 浩光

創英に入所して4年目となりましたが、まだ学ぶべきことが多いと日々感じております。更なる実務能力の向上を図り、お客様から頼りにされる弁理士を目指していく所存です。今後とも宜しくお願い致します。

どうぞよろしく

お願い致します！



## 山口 和弘

特許関連業務において、国内国外を問わず出願前から権利化後まで様々な場面でお客様をサポートできるように、研鑽を積んで行きたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。

創英インフォメーション



## 創英ドットネット 特許情報フェアに出展

11月8日から10日までの三日間、北の丸の科学技術館で開催された特許情報フェアに出展し、創英の商標管理ツールである創英ドットネットの紹介をしました。特許事務所が公開するITツールということで、沢山ののお客様にブースへお越しいただきました。

また、別室で約1時間の企業プレゼンテーションを行い、WEBを用いた創英ドットネットの実演紹介をしました。ここにも予想以上に多くのお客様が参加され、盛況のうちに終わることができました。お越しいただいた多くの方々に礼申し上げます。

